

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

5 種オスになりたかった子ウシ

第五日め（三月二十日）

光がまぶしい。風がつよい。ラクダの毛が黄金色にかがやいてなみうつている。ラクダはすわってまわっている。

鞍のついたままのラクダが、朝方、草フレ（囲いこみ草地）からつれてこられた。ラクダ用の鞍は、ウマのそれとは異なり、木製の枠がない。フェルト製の鞍敷のようなものである。ラクダの二つの瘤のあいだにとりつけられている。まず、わたしがすわり、わたしのまえに少年バトビリグがすわった。二つの瘤のあいだに、一緒にすわる二人のり。

バトビリグは、南の宿营地にいる孫の一人。そこは、次女のチョルム姉さん一家と、次男のリンチェンドルジ兄さん一家から構成されている。リンチェンドルジの次男であるバトビリグは、昨日からダンゼン本家に遊びにきていた。彼はいまから、南の自宅にかえる。

「大丈夫かな、二人ものって」

「平気平気。ラクダというものは、五百斤まで平気ではこぶことができる」

と父さんは解説する。一斤は五百グラムだから、ラクダの積載限界は二百五十キロというわけだ。もちろん、小柄なわたしとバトビリグなら、たしてもせいぜい百キロ以内だから問題はない。

「まえに、大人二人をのせたこともある。平気平気」

とウネルバヤンはいいいながら、自分は自分のウマに自分の鞍をつけている。騎乗して、ラクダの手綱を引いていくつもりらしい。

二人がすわると、ラクダは後足から立ち上がる。バトビリグもわたしも、前方につんのめる。バトビリグはラクダの瘤にしがみつく。わたしはバトビリグにしがみつく。ラクダが前足をたてると、二つの瘤は水平になり、おちる心配はなくなる。ラクダはさっそくあるきはじめた。

南にむかう。ゲルのつくる方向からいって南だから、磁石で正確にいうとちょうど南東になる。ウマにのる人に手綱をひかれているため、どうしてもウマのあとをラクダがついていくことになる。ラクダが素直にすまない。目前にみえるウマの後足が気になるらしく、たいそういやがる。ウマにけとばされるところでも思うのであるうか。そこで、手綱をかえしてもらおう。わたしとバトビリグの二人で手綱をもつて、ウマとは距離をおいて、単独で南にむかった。

ラクダの歩くスピードはさほど速くない。人の速足程度にすぎない。それでも、こんな風のなかを歩けばたいそう疲れるだろうことを思うと、ラクダは楽だ。十五分ほどで南家到着。きょうは、ここでウシの去勢作業がおこなわれる。

ウシにかぎらず、五畜はいずれも去勢する。オスたちは、交尾期になると発情してたがいにあらそう。たくさんのおスがいることは、群れを維持する人間にとってのぞましくないと考えられる。種つけ用として必要な頭数だけを確保し、それ以外は屠殺されるか、去勢されることになる。モンゴルでは、子の段階でオスが屠殺されることはない。すべて去勢されて生きつづける。やがて、食用に屠殺されるものの、群れのなかで去勢オスがしめる割合はかなり高い。他の牧畜民でせいぜい一割であるのに対し、モンゴルでは五割にのぼることもまれではない。



ウシの去勢作業。手前にみえる棒がバガナ。

去勢は、モンゴル語でさまざまに表現することができる。「ホンゴロホ」といえば「軽くする」という原義。「ブール・アバハ」で「睾丸をとる」、「ウル・アバハ」で「種をとる」などなど。どれもおなじ意味だが、おおよそ家畜種ごとにつかいわけられている。乳および搾乳について、家畜種ごとに区別せず、画一的な表現をもちいるのに対して、去勢にかんして多様な表現があることは、注目にあたいる。

ラクダの去勢は、三月上旬頃。三歳をむかえる子ラクダにほどこす。「ツアガールハ」と表現されることが多い。つづいて三月下旬頃にウシの去勢。二歳をむかえる春におこなう。これは「ブール・アバハ」などと表現される。六月になると、生後四ヶ月頃のヒツジ・ヤギが去勢される。「ホンゴロホ」とよばれる。ウマの去勢は六月上旬頃。三歳をむかえた子ウマが対象となる。「ウル・アバハ」と表現される。「ウレー・ハイラハ」ともいう。「アクトラハ」といえば、アクト（去勢ウマ）にするという意味である。

家畜種によつて去勢の年齢、時期は異なつてゐるように見えるけれども、原則はまったくおなじ。かならず、成熟するまえに去勢する。交尾をするオスにはさせない、という去勢の目的からいって、それは当然のことである。この当然な合理性が、世界のすべての牧畜民に通用するとはかぎらないのが、むしろ不思議である。

去勢の具体的方法は、どの家畜もほぼおなじ。ただし、大型家畜には木杵をもちいることがある。とくにラクダなど。具体的な作業よりもはつきりちがうのは、とつた丸の食べかた。ラクダのそれは食べない。ウマのは焼いて食べる。ウシとヒツジのものは乳で煮る。ヒツジのほうは、穀類もふんだんにつかつておかゆのようにして食べることが多い。

南家の石垣のなかに、すでに子ウシがあつめられている。子ウシの背丈は一メートル程度。どれも「ビャロー」とよばれる二歳子ウシ。満一歳の子ウシである。北の二戸と南の二戸が所有する、すべての二歳子ウシが集合している。全部で十八頭。誕生期のちがいから大小の差もすこしあるが、本日もせいに去勢してしまう。

共同で作業にあたる人びとが集合した。チョルム姉さんは、けさしぼった牛乳と煎った黍をいれた金属製バケツをもつて、石垣にはいつてきた。リンチェンドルジ兄さんの手には、小さくて細いナイフがある。ウルジーチンゲルはウマとり棹をもつ。ウネルバヤンは、木製の棒と煙のでている金属製容器をもつ。南北四軒から一人ずつ作業にくわつてゐることになる。ほかに数人の助っ人がいる。

まず、一頭ずつ子ウシをつかまえる。ウマとり棹の先にある縄に、子ウシの頸をひっかける。子ウシは、石垣のなかをはしりまわる。弧をえがいてはしる子ウシに並走しつつ、子ウシをつかまえて横だおしにする。子ウシとすもうをとつてゐるように見える。決まり手は、角をにぎつての横だおし。子ウシがたおれると、いっせいにみんなで子ウシのうえにすわる。尻にすわる人は後足をおさえる。胸にすわ



子ウシをたおしておさえつける

る人は頸をおさえる。腹にすわる人は前足をおさえる。つぎに、すばやく前足二本と後足二本を縄でゆう。後足をぐっと前方にひっぱるようにしてしる。しばった足の後方に、袋がはつきり姿をあらわす。

執刀役が近づく。袋の皮を五センチほど切る。

浮袋のような中身をとります。玉を二個と睨。牛乳などをいれたバケツにいれる。とりだすとき、内皮に切れ目をいれなおすときもある。傷口にツバをはきかける。傷口を両手でふさぐようにおしつける。一頭、終了。縄をほどく。人びとがいっせいに立ちのく。子ウシはすこしヨロヨロして立ち上がる。石垣のそとにつれだす。

つぎの一頭を縄でひっかける。

「それ、娘よ、娘」

と声がかかる。メスの子ウシだ。これはそのまま石垣のそとへつれだす。そして、つぎの一頭へ。

こうした去勢の具体的な方法は、おそらくかなり普遍的な方法であろう。問題は、去勢にこめら

れた文化的な意味である。

去勢の特殊な方法は、その去勢時期とともに、去勢をどのように認識し、理解しているかという文化的な差異を反映するはずである。たとえば、睾丸をたたきつぶすという方法は、しばしばすでに成熟したオスに採用されていて、オスの性をあらかじめ発動させないという本来の去勢の目的とはちがっているように思われる。

また、たとえ普遍的な方法を採用しようとも、文化的な意味は一樣ではない。たとえば、去勢された個体がその後どのように利用されるかという差異がある。くわえて、去勢のさいに実施される、生業技術としては「不要な」行為も、文化的な意味をになっているものとして注目される。いわゆる儀礼的行為である。

モンゴルでは、去勢した子ウシを石垣のそとにだすまでのあいだに、ちょっとした儀礼的行為をおこなう。子ウシに棒をまたがせ、煙をくぐらせるのである。ここでも実施されていた。

棒は、バガナとよばれる支柱。ゲルの中心部にあり、かまどの両わきにたち、天窗をささえる棒である。いわば大黒柱。実際には、この地方のゲルでは使用されることがない。この柱がなくても、家の構造は安定している。実際には使用しない大黒柱なので、もはや家の寸法とは食い違っている。形式的に各戸で維持されているにすぎない。それでも、儀礼には欠かせない。この柱にはイエを象徴する意味があるから、実際に使用しない柱を、各戸にそなえつづけている。この棒をまたぐと、術後の経過が軽くてすむという。

煙のでている容器には、畜糞と、煎った小麦粉と、なまの黍がはいっている。煙をだす主たる要素は畜糞である。この煙は、子ウシのからだによい、とされる。去勢する時点から、子ウシのそばにもっていく。



ミルクの中にウシの糞丸

棒は、明確に去勢後にまたがせる。煙は、去勢中もかがせようとする。そこに微妙な差異があるものの、ともに子ウシの傷をいやすのに効果がある、と解釈されている。去勢は一種の手術である。経過がわるければ、最悪の場合、死もありうる。個体にとっての危機。これを無事に通過してほしいと人びとがねがうのは当然であろう。ただし、煙をかぐのはまだしも、棒をまたぐことが、生理学的な効果をもたらすとは考えられない。棒またぎと煙くぐりはともに、むしろ象徴的な意味をになっている。生理学的な効果ではなく、認識上の効果があるといえよう。

出血した状態からの「浄化」というプロセスが象徴されているのかもしれない。またオス個体にとっては「通過儀礼」といえるかもしれない。オスからオスでなくなるといふ身分の変化をとまなっているからである。否、オスになるまえからオスにはさせてもらえない。それが未成熟段階での去勢である。この点を重視すれば、子畜から成畜になる通過儀礼というべきかもしれない。

ところで、バガナとよばれる支柱は、ウシにかぎらず、ヒツジ・ヤギの去勢にも利用される。さらに家畜にとどまらず、人間の儀礼にも利用される。

婚姻儀礼において、新婦がはじめて新郎のゲルにはいるときにもちいられる。当初は嫁入を拒否する棒として、つづいて受容する棒として機能する。バガナでゲルの戸をふさぐことによって拒否のポーズをしめたのち、バガナをまたがせることによって最終的な承諾が演じられる。またぐ本人すなわち新婦にとっては、またいではじめて新郎の家系に包含されたことになる。新婦は、そののち新郎の家のかまどに叩頭して、さらに新しいメンバーシップの樹立につとめるのである。

去勢の場合も、単に性の側面にかぎらず、人間との関係における立場の変化があるのかもしれない。単なる通過を意味するのなら、またぐものはなんでもかまわないだろう。とりわけ家を象徴し、人間ならもつぱら婚姻儀礼にもちいられるバガナを、なぜことさらに利用するのか。バガナをまたいだ去勢オスは、もはやその家の人びとの世界にはいる。去勢によってこそ決定的に人の管理下にいたる、ということバガナまたぎが端的にあらわしているのではないだろうか。

人間にとってはもちろんのこと、家畜にとつてもまた、バガナまたぎの行為は、異質なものが家内の領域に受容されることを意味しているであらう。そのときバガナは、家内として親密な空間と異質な空間とをくぎる境界となる。去勢してより身近になる状態と去勢以前のより野性的な状態とのあいだを、明瞭に区別する境界となる。

人間の婚姻儀礼では、バガナのあとに炉ないしかまどが舞台装置あるいは道具として登場することによって、それらのもつ儀礼的機能が明確になっている。これに対して、家畜の去勢儀礼ではかまどが登場しない。あるのは、ただの煙。ただし、火をおこしているのは、いつもかまどにくべられる畜糞である。なまのもの（黍）と加工したもの（小麦粉）という組合せは、調理をはじめとして、あらゆるもの

の状況変化を象徴しているのかもしれない。すると、あの煙は、じつはかまどの分身なのかもしれない。そもそも家畜とは、一般に「生殖が人間のもとに管理された動物」と定義される。生殖の管理としては、血統の操作、出産時期の操作などがふくまれる。とりわけ去勢は、生殖に関与できないことを決定づけるという意味で、もっとも本質的な操作であるといっても過言ではない。さきの定義からみれば、去勢は家畜化をあらわすもっとも典型的の介入である、といえよう。人間と動物のこのような関係のありかたを、バガナまたぎによりみとることができないだろうか。

モンゴルの去勢をめぐる儀礼的行為は、去勢によってこそ、動物が家内のもの、つまり家畜になることを表現しているように思われる。家畜化がすすめられてきた歴史がそこには示唆されているようにみえる。少なくとも、モンゴルにおける去勢オスの意義は明示されているであろう。

バガナをまたいだりではじめて人のものになるという過程をへるのは、去勢オスだけである。メスは乳をだすようになって、バガナをまたぐことはない。その意味で、メスははじめから人のもとにあるのかもしれない。あるいは、搾乳という部分的利用はあっても、メスというものはついには人のものにならないのかもしれない。メスはともかく、野性的行動をしめすオスはそのままでは異質な世界にとどまる。去勢してはじめて、異質な世界から受容される。このことを、モンゴルの人びとはバガナまたぎをつうじて去勢のたびごとに黙示的に理解していることになる。

去勢されると、ウマとラクダは乗用になり、ウシは役畜となり、ヒツジ・ヤギは肉用として太って美味になる。群れの安定をもたらすと同時に、それぞれの家畜種ごとに、去勢の効果が発生する。いずれも、モンゴルの遊牧を特徴づける経済的意義である。こうした経済的意義を、文化的意義に転換してよみとるうえで、去勢儀礼は重要な考察材料となる。



この猫もついでに去勢されてしまった

作業の途中、一頭の子ウシが石垣をとびこえて無断でそとにでてしまった。単純作業のくりかえしに少々退屈しはじめていた人びとは、はしゃぐ。「なんて元気なやつ。種オスにしてやりたいよな」

「自分で種オスになろうとしたんだろうさ」

およそ一時間で七頭の去勢をおえた。一頭が逃亡したから、オス八頭にメス十頭だったことになる。

とりだされたウシの睾丸は、容器から鍋にうつされた。牛乳と煎った黍少々もそのままうつし、煮ること数分。睾丸の皮はなかなか歯では噛みきれない。ナイフで切ると汁がとびだす。女性はあまり食べたがらない。子どもには栄養があるとすすめる。わたしは、好奇心で年齢をはかり、子どもの範疇にみずからはいって、食べた。おいしい。魚の白子のような味。ちなみに、ウマのを焼いたもののほうがもっとおいしい。

この日一日の挨拶は、いつもとちがっていた。みな、「軽いか」と質問する。本日ウシの去勢が

おこなわれたことを知っているから、その後の経過をたずねているのだ。容態はどうだ、というほどの意味である。とくに心配しているのがチョルム姉さん。彼女の所有する二歳子ウシのうち唯一のオスが、去勢時にあばれたため、深い切傷をうけ、大量に出血したからである。子ウシの様子をみにいった人たちが、「軽い」とつげる。経過は順調らしい。風はつよいが、さほどさむくもない一日になってよかった。

この日種オスになりたがった子ウシのことをきいて、モーシ母さんは息子たちの仕事ぶりを非難した。「黒のまだら」という模様から、どの子ウシかを確認すると、母さんはきつぱりと断言した。北家と南家とは、すでにそれぞれ一頭ずつ種オスウシがいる。この二頭で十分。そんなにたくさん種オスウシがいてどうする。黒のまだらは、種オスウシとして不合格。その母ウシは、角なしの、まだら模様の、あの小さな体格のウシではないか。近日中にあらためて去勢すべし、と息子たちに命令がくだった。

モンゴルには、

「子ウシでありながら

種オスウシのようにふるまう」

ということわざがある。身分あるいは能力に不相応な傲慢な態度を非難する表現である。

去勢されれば、もはや種ウシのようにふるまうこともない。子ウシたちの生涯プランが、この日ほぼ確定した。